



郷土史

# ていね

第 71 号

平成 25 年 11 月 13 日  
手稲郷土史研究会会報

第 90 回(平成 25 年 10 月 9 日)定例会の研究発表要旨

## 鉱山発掘・思い出・無想

前田 平木 重男 氏



平木さんは、「石炭鉱山と金属鉱山の採掘に伴う災害の違い」という題で、平木さんの体験に基づき話をされました。

平木さんは、先年、自分史「乗り越えた天寿」を上梓されています。その本や今回の平木さんの話にも随所に語られていた「波乱万丈の歩みの中にも、平木さんの強い願望や意志、信念とねばり強い努力があったこと」に深い感銘を受けました。

平木さんは 19 歳のとき、満蒙開拓団として一家で満州に渡りました。そして、そこで召集され、家族とは別れてしまいました。昭和 20 年の終戦の数日前に、中国人の友人から情報を得て、軍隊を離れ避難民として一年余り中国で生活をして、昭和 21 年にふるさとへ引き揚げ復員しました。

元の国鉄に復職せず、体調の回復を待ち三井上砂川鉱山に就職しました。

炭鉱での仕事は、坑外機修員として働き、日中は工場で採炭機具の製作や圧搾機、ポンプ等の修理をして、要請時には入坑して配管等の工事をおこなったそうです。

平木さんは、この仕事には溶接の高度の技術が重要であることに気づき、先輩に教わった技術だけでなく、仕事のやりくりをして、溶接の技術を学ぶために苗穂の溶接学校へも夜間通ったそうです。ここで当時、北海道でもあまり見られなかった高度な溶接技術を身につけることができ、炭鉱の仕事やその後の仕事に大いに役立ったそうです。

今回の発表では、平木さん自身が描かれた、三井上砂川鉱山の坑道の様子や「石炭を採炭して、運び出す仕組み」そのためのさまざまな機械やさらにその組織だった炭鉱の出炭までの仕組みについて、平木さんのされていた仕事とともに詳しく説明されました。また、炭鉱の施設や機械の写真をもとに話されたので聞いている私たちにもよくわかりました。

そして、平木さんが出会った坑内での水没事故と、石炭を搬送する機材パンサーを撤収して斜坑をおろしているときに同僚が転落した事故について詳しく話をされました。一人は亡くなり、もう一人は身体が不自由になったということで、本当に悲しい事故でした。

金属鉱山での事故等は、落盤と出水が主なものであるが、炭鉱は落盤、出水のほかにもガス爆発も多くあったそうです。金属と石炭の生成された時代や岩盤の固さも違い、炭鉱では石炭層に含まれるメタンガスが爆発すると大きな犠牲者がでることになります。

明治以来、北海道や日本各地の炭鉱でのガス爆発で大勢の犠牲者が出ていることを話されました。特に、昭和 38 年三井三池三川鉱でのガス爆発は 458 人もの犠牲者を出し、わが国のエネルギー源を石炭から石油に転換する契機となり、炭鉱が斜陽産業となっていくことになったのです。このときに平木さんは、国会まで請願に行ったことなども話されました。

しかし、厳しい仕事の中にも炭鉱での生活の楽しさや、組合活動、生協の設立に活躍されたことなども思い出いっぱいに話されました。

炭鉱を退職後は、札幌へ転居、日本除雪機へ再就職しました。この会社でも平木さんの溶接の技術が優れていたことがたいへん役にたち、除雪機の性能が大きく向上したそうです。

学校時代の友人、軍隊時代の友達や中国での引き揚げてくるまでの仲間との交流、中国で別れた家族との再会や集団自決という痛ましい事件で帰国できなかつた家族について調査したことなど、いつも家族や友達を大事にする平木さんでした。札幌での町内会での活躍や今日に至るまでのことを、私は教科書のように昭和史・戦後史として聞き入りました。また、お聞きしたいです。

ありがとうございました。

(文責 菅原直)

## 手稲鉾山の歴史を掘り下げ

～ 朝鮮人強制連行・労働の実態に迫る ～

曙 西田 忠行 氏



兼ねてから関心・興味を持っていた戦前の「朝鮮人強制連行と労働の実態」を勉強し調べ、発表する機会をいただきました。それは、手稲鉾山の歴史を調べるなかでの挑戦となりました。と言っても、70年程も前の歴史的事実をその時代の方々から「証言」をいただいたり、「現地を歩く」等という説得力のある調査とはなりません。

手稲郷土史会の諸先輩の研究成果や札幌郷土を掘る会編集・発行の冊子や資料、浅田政広氏著の「北海道金鉾山史研究」等をみていくうちに、私にとっての新しい事実に触れることができるという調査研究でした。強制連行と労働、その中での生活実態が被害者であった朝鮮人はもとより、加害者の立場の日本人においても悲惨・過酷であったといえましょう。それらの証言の多くから、民主主義が破壊され、基本的人権が侵害され、人の命が鴻毛より軽んじられた歴史の「真相」があったことを思い知らされました。

以下、「発表のまとめ」を補足して、

- (1) 明治から昭和にかけての手稲鉾山の歴史をはじめ様々な産業の「発展」「開発」が国の戦争政策の遂行と一体で進められ進展していき、戦争の収束と共に鉾山開発も下降していったのでした。
- (2) 日本軍国主義による戦争政策は、国民の命と生活、そして、民主主義と基本的人権を極度の圧迫状態に落とし込まれました。
- (3) また、過酷な植民地支配を徹底させての朝鮮民族に対する同化と民族蔑視の虐待支配は「世界に類例を見ない」といわれるような凄惨を極めました。

もちろん、多くの人々が、国の戦争政策に翻弄されながらも、厳しい自然と生活環境の中で手稲鉾山を切り開き地域を発展させ、血と汗と涙で命をかけて生き抜いてきたのです。

### 次回の予定

次回(12月11日)は、國井和夫氏の「オホーツクの海にソ連にしん輸入船団を率いて」と高木秀子氏の「北国の泰斗～富良野人の聡さん」の研究発表を予定しております。  
会場は、視聴覚室です。

1993年(H5)8月4日に出された日本政府の河野官房長官談話の一節を紹介し、本稿のまとめとします。(慰安婦関係調査結果発表に関する内容ですが、日本の朝鮮植民地支配全般への反省を表した内容でもあります。)

「——我々はこのような歴史の真実を回避することなく、むしろこれを歴史の教訓として直視していきたい。我々は歴史研究、歴史教育を通じて、このような問題を永く記憶にとどめ、同じ過ちを決して繰り返さないという固い決意を改めて表明する。」

### ☆ 催物案内 ☆

当会の下部サークル『文芸サークル』では、11・12月に特別企画として、次のような研修を計画しております。関心のある方はご参加下さい。

会場：富丘西宮の沢会館

(手稲区富丘2条2丁目 TEL. 685-4745

JRバス 上富丘停留所)

会費：会場費として300円、ご協力下さい。

#### ● 「有島武郎・木田金次郎」を聴く

11月27日(水) 13時30分～

西尾貞敏氏(当会会員)に、「有島武郎・木田金次郎」について懇話形式でお話を伺う予定です。

#### ● 映画鑑賞会「北の零年」

12月25日(水) 13時30分～

郷土史研究会員としては、バッタ群の襲来シーンが印象に残るカットです。